

半世紀近くにわたる多様な 作品活動の軌跡を丹念に追う

堀 切 直 人

樋口 良澄著

唐十郎論

逆襲する言葉と肉体

唐十郎作・演出・出演の
紅テント芝居は一九六七年
に劇団状況劇場公演として
始まった。そして、八八年
には状況劇場は解散して、
新たに劇団唐組が結成さ
れ、以来、今日に至ってい
る。本書の著者は一九七〇
年代の初めから唐十郎の芝
居をずっと観続けてきて、
のちには編集者として唐の
戯曲、小説の単行本を数多
くまとめ、最近では唐組の芝
居をくり返し観て、紅テン
ト設置の作業を手伝うなど
している。唐十郎の半世紀
近くになたるロングランの
作品活動にそのように息長
くつき合ってきた著者によ

う一つのあり得べきポスト
戦後をつかみ取ろうとする
ものであったことを示す。
一九八〇年代から九〇年
代初めにかけての唐十郎の
作品活動は時代との関わり
の点で苦役に満ちたもので
あったが、著者はこの時期
の唐作品に、同時代的現象
としてのバーチャル・リア
リティと唐なりの形を取り
組む実験的試行の企てを見
出している。

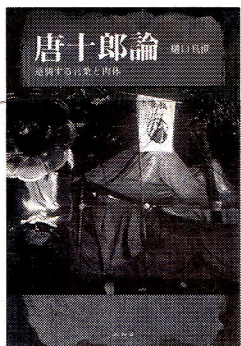
このように一九六〇〜九
〇年代の唐十郎の作品活動
を確認していった末に、二
十一世紀に入ってから現在
に至る唐の芝居に言及する
に至って、著者の筆は生動
しはじめる。この時期の唐
の芝居は美はちゃんと論じ
られていない。唐十郎の芝
居について長年書きつづけ
てきた私自身、二〇〇三年
の『泥人魚』と〇四年の

『津波』の劇評を書いたあ
と、〇五年以後は新宿梁山
泊、唐セミ、唐組による唐
十郎の旧作の再上演にのみ
筆を及ぼして、新作には
まったく触れていない。
ところが、著者はここ数年
の唐の芝居を、戯曲を読み
こんだうえで、くり返し、
しっかりと観ており、これら
の新作を「もの」にのめり
こんだ労働者たちの「もの」
との関わりのドラマとして
きっちり評価している。

著者は東日本大震災発生
以前に本書の構想を抱いて
いたが、本書執筆中に大震
災が起こった。本書はこの
大震災後の精神状況を現在
進行形で作中に取りこむの
に成功している。一面、焼
け野原になってから、すぐ
に焼け跡に掘って立て小屋を
設けて、焼け跡のオフジェ
に用いて芝居はすぐに立ち
上がる。本書中の劇評で、もう一
つ光っているのは唐十郎作
・新宿梁山泊公演の『風の
ほこり』についての評であ
る。著者は、本作のヒロイ
ンである、浅草六区の劇場
裏で軽演劇の台本を書いて
いるカヨの義眼が、浅草十
二階下の娼婦から衛生博覧
会の見世物にまで身を落と
したお浪から借り受けたも
のであることが判明するシ
ーンの衝撃を語っている。

実は筆者は昨晚、『風のほ
こり』の何度目かの再演を
観に行き、そのシーンをじ
っくり見取ってきたばかり
なのだ。（ほりきり・なお
と氏）文芸評論家）

★ひぐち・よしずみ氏は
編集者。「現代詩手帖」
「文藝」などの編集に携
わる。共著に「木浦通信」
「東京情報コレクション」
など。一九五五(昭和30)
年生。



四六判・224頁・2100円
未知谷
978-4-89642-364-8

近刊セレクト

文学芸術

◇「怪奇・幻想・縮想
文学集 種村季弘翻訳集
成」(A5・六五二〇円
・国書刊行会・2月25日
刊) 吸血鬼小説からアラ
ック・ユーモア文学、ナ
ンセンス詩まで、奇才が
翻訳した奇想渦巻く小説

・戯曲・詩の集大成。
◇有吉玉青「美しき一
日の終わり」(四六・一
七八五円・講談社・2月
29日刊) ただ一日の逢瀬
を想い、長い歳月を生き
抜いてきた男女。異母姉
弟の二人が、秘めてきた
気持ちを初めて明かす。
至極の恋愛小説。
(仮題、予価を含む)